



イネ縞葉枯病の本田防除の徹底について

ヒメトビウンカの防除適期が早まっています！

県病害虫防除所では、①本年5月中旬に県西・県南地域の小麦畑におけるヒメトビウンカの生息数は平年並みである、②2~3月に採集したヒメトビウンカ越冬世代幼虫のイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率が県西・県南地域16地点中8地点で5%以上の高い値であり、③5月23日現在の有効積算温度から計算した水田におけるヒメトビウンカ第一世代成虫の産卵最盛日が、平年よりやや早い~早いと予測されていることから、**病害虫速報を発表**し注意を呼び掛けています。

(https://www.pref.ibaraki.jp/nourinsuisan/nosose/byobo/boujosidou/yosatsu_joho/documents/sokuhour6-3.pdf)

イネ縞葉枯病の発生地域で、**今年の田植時に育苗箱施薬していない水田や、昨年、育苗箱施薬してもなお本病の発生が多かった水田では、**下表を参考にヒメトビウンカを対象とした本田防除を実施してください。

表1 水田におけるヒメトビウンカ第一世代成虫の予測産卵最盛日および予測防除適期

アメダス地点	古河	下館	下妻	つくば	土浦	笠間	水戸
予測産卵最盛日 ¹⁾	本年 6/3	6/7	6/6	6/7	6/4	6/12	6/10
	平年値 ³⁾ 6/9	6/13	6/12	6/13	6/11	6/17	6/15
予測防除適期 ²⁾	本年 6/3-10	6/7-14	6/7-14	6/8-15	6/5-12	6/12-19	6/10-17

1) 今後の気温が平年並に推移した場合の有効積算温度から予測した産卵最盛日 (5月23日現在)。

2) 予測産卵最盛日から7日後までの期間。

3) 前年から過去10年間の平均値。



防除のポイント

- 1 本田に飛来した成虫が、産卵、ふ化して発生する第二世代幼虫を対象に本田防除を実施します。
- 2 麦畑で産卵、増殖したヒメトビウンカが水田に侵入するため、周辺に麦畑がある水田では特に注意が必要です。なお、防除にジャンボ剤や豆つぶ剤、粒剤を使用する場合は、効果が出現するまでの期間を考慮して、**液剤等の散布より (薬剤により異なりますが) 3~5日くらい早めの処理が必要です。また、施用時は湛水状態 (3~5cm程度) で田面に均一に散布し、4~5日間は湛水を保ち、散布後7日間は落水やかけ流しをしないでください。**
- 3 **育苗箱施薬剤として IRAC コード 4A を含む薬剤 (アドマイヤーCR箱粒剤、スターダム箱粒剤、ダントツ箱粒剤、デジタルメガフレア箱粒剤、ロングリーチ箱粒剤、フルサポート箱粒剤など) を施用した場合には、抵抗性ヒメトビウンカの出現を抑制するために、本田防除では IRAC コード 4A 以外の薬剤で防除します。**
- 4 遅植えのイネが本病に感染すると、被害が大きくなる傾向がありますので、防除を徹底しましょう。

表2 水稲 本田におけるヒメトビウンカ (ウンカ類を含む) の主な防除薬剤 (令和6年5月29日現在)

薬剤名	使用量または希釈倍率	使用時期 / 使用回数	分類
エクシードフロアブル	2,000倍	収穫7日前まで / 3回以内	4C
スタークル豆つぶ	250~500g/10a	収穫7日前まで / 3回以内	4A
ダントツ粒剤	3kg/10a	収穫7日前まで / 3回以内	4A
トレボン乳剤	1,000~2,000倍	収穫14日前まで / 3回以内	3A
なげこみトレボン	水溶性容器10個 (500ml) /10a	5葉期以降 (但し収穫21日前まで) / 3回以内	3A
スミチオン乳剤	1,000倍	収穫21日前まで / 2回以内	1B

注) 分類欄には、IRACコードを記載しました。同一分類 (コード) は作用点が同じなので、連用は避けてください。

本病の特徴や防除対策の詳細な内容については、茨城県農業総合センター 農業研究所発行の下記マニュアルもご参照ください。
「イネ縞葉枯病防除マニュアル (茨城県版)」

https://www.pref.ibaraki.jp/nourinsuisan/noken/documents/r3_shimahagare_manual.pdf

- 農薬使用の際は、必ずラベル及び登録変更に関するチラシ等の記載内容を確認し、飛散に注意して使用して下さい。
- 営農 NEWS は JA 全農いばらき ホームページでもご覧になれます。